

私に現象学的教育学を

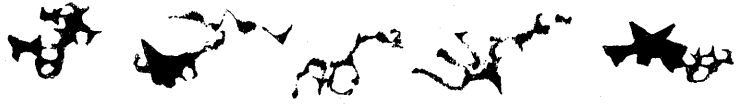
教えてくれた人

— エディット・フェルメール —

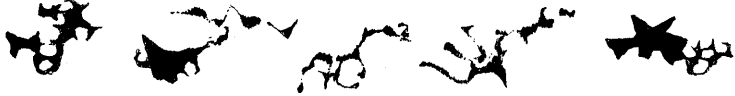
津守 真

一九九六年六月、エディット・フェルメール先生の葬儀の知らせがオランダから届いた。フェルメール先生は、私が新しい人間学を模索していた時期に、ヨーロッパの現象学的教育学の考えを教えて下さった恩師である。

一九七二年に東京で国際心理学会が開催されたとき、「発達の連続、非連続」のシンポジウムで私は子どもの描画の研究を報告した。シンポジウムが終わったとき、品



のよい西洋の婦人が近寄ってこられ、壇の下から質問をされた。その姿には少しも偉ぶったところがなく、その質問も私の報告の本質にふれたものだった。それから始まって何度も来日された。日本人と日本の文化を愛し、お茶の水女子大学の附属幼稚園を好んでたびたび立ち寄られた。私の家に一週間も泊まれたこともあった。M・J・ランゲフェルトを知っているかと尋ねられたが、当時私はオランダの現象学について何も知らなかった。私のところに来られるたびに、かならず書物をプレゼントしてくださった。ランゲフェルト著『子どもの人間学』『教育と人間の省察』や、グレッツィンゲルの名著『幼児画の謎』などなどいちいち教え上げるときりがない。日本語訳で出版されているものはそれも調べてくださった。専門書だけではなく、ローラン・バルトの象徴論、フリーユゲルの絵画の解釈、エッシャーの絵の解説など、文化の多岐にわたっていた。私は自然科学の思考法とは異なった地盤に立って人間学をつくりあげてきた人達がヨーロッパにいたことを知って力づけられた。先生ご自身は、メルロ・ポンティを中心とする二十世紀半ばの現象学を、オランダのユトレヒト大学で学ばれ、そこで博士の学位をとられ、ランゲフェルトが創設したユトレヒト大学「教育と人間学の研究所」で実際の子どもの仕事をして来られた。その時代を生きられた真の教養人である。



先生がお茶の水女子大学でなされた講義が「幼児の教育」七十七卷一号（一九七八年）に掲載されている。先生の考えがよく要約して語られているので引用したい。その中で、先生はメルロ・ポンティとフロイトを対比させて次のように言われる。

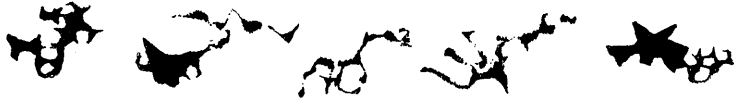
「フロイトは、自分の幼少期のできごとをある期間忘れていて（無意識）、後になってそれが出てくるという歴史的考え方をします。それに対して、メルロ・ポンティは、現在の時点に立って、身体の中の感覚（無意識）から、上方の意識のレベルまでの縦の線を考えます。上方の意識のレベルから次第に自分の内側にずっと下がってくると、明瞭な意味は分らないけれども深いところの身体感覚がある。それがイマジネーションの源である。これがメルロ・ポンティのいうポディーアイ（身体の眼）で、身体のもっている理解の仕方です」

「子どもは私どもにとって他人だから理解不能という考え方もあります。けれども子どもは決して閉ざされた存在ではないし、我々おとなも閉ざされた存在ではありません。相互主観的に合致するものがあります。絵であろうと、あるいは遊びであろうと、いろいろなところに子ども自身は表現されますが、その表現されたものを合理的な方法で現実の中でとらえるだけでは理解にはならないでしょう。表現されたものはその子ども自身の非合理的なものに由来するので、非合理的な世界の理解ができないと共通の理解にならない。これがつまり想像（イマジ

ネーション)です」

あるとき、フェルメール先生は愛育養護学校に來られた。子どもが砂場で水と泥をこねていた。ひとりの職員が砂山を作ったら、子どもがそれをこわした。その職員はそれをそのままにしていた。フェルメール先生はその場面で職員がどう思っていたか、子どもの遊びをもう一歩先へ発展させようと思っていたかどうかを尋ねられた。その職員は直ちに「その子もつと面白く楽しむのにはどうするかを考えるが、もう一歩先へ遊びを伸ばそうという風には考えない」と答えた。先生はその答えに共感して、砂をいじる感触や、身体の感覚がもとになってイマジネーションの世界が展開するのであることを語られた。

一九八四年一〇月に頂いた手紙には、ランゲフェルト先生が日本に來られて間もなく、夫人とお嬢さんを亡くされ、最近健康がすぐれず、ユトレヒト郊外のビルトーフエンの住み慣れた家去って息子さんの家に住まわれることになった旨が記されていた。私は、花に囲まれた美しいお宅で、ご夫人と、フェルメール先生も一緒に歓談したときのことを思った。ランゲフェルト先生が亡くなったのはそれから幾年も経ない時であった。フェルメール先生は非常に悲しまれた。それでも私への手紙には、日本からオランダに留学したJさんのことを細かく記し、私の安否を尋ねて「あなたは



今までよりも子ども達と一緒に過ごす時間が多くなって満足でしょう」と付け加えられた。フェルメール先生が最後に日本に来られたのは一九八六年三月末であった。

もう何年も先生からの音信が絶えていたが、先生は過去の記憶をなくされて悲しいとユトレヒトの友人からのクリスマスカードに毎年記されていた。

エディット・フェルメール先生は、二十世紀のヨーロッパの現象学的教育学を日本に紹介された人である。子どもの学問を語る時、先生の名前を忘れることはできない。